

はじめに

二一年、米国の安全保障専門家、マイケル・クレアは Resource Wars という興味深い本を刊行した。そこで、彼は、①世界需要のあくなき増加、②深刻な資源不足の表面化、③所有権をめぐる争いの拡大、という三つの要因が今後、国際システムに新たな緊張をもたらすだろうと指摘している。いずれの要因も資源にかかわる重大問題であり、「資源戦争」と呼ぶに値する火種が世界中に広がっていることを意味している。

それはまた、資源大国ロシアの地位の相対的上昇という観測を可能にする。ソ連崩壊後、その後継国家となったロシアは軍事的にも経済的にもその脆弱性を披瀝し、米国に伍す立場から転げ落ちた。だが、日本の五倍近い面積をもつ世界最大のロシアには、さまざまの資源がある。天然ガスの埋蔵量は世界最大であり、石炭の埋蔵量は第二位だ。石油埋蔵量は統計資料によって第二位であったり、第七位であったりする。ほかに、白金族金属やアンチモンの埋蔵量は世界第二位であり、マグネシウム、タンゲステン、バナジウムが第三位、インジウムが第四位、金やレニウムが第五位だ（いずれも米国地質調査所、二一年）。

本書の課題は、資源大国ロシアの「内部」を詳しく分析することで、ロシアの現状を主として政治・経済の両面から分析してみることにある。そうすることで、対ロシア外交だけでなく、対ロビジネスにおいても、きつと役立つことがあるに違いないと期待している。そのためには、個別の企業集団ごとに詳細な分析が不可欠となる。半面、それは読者には煩雑でわかりにくい面をもつ。しかし、そうした錯綜したジグソーパズルを解くところに、いまのロシアの実像が浮かんでくるのではないか。

筆者は、『ロシアの軍需産業 軍事大国はどこへ行くか』(二 三年、岩波新書)において、ソ連の非軍事化について考察した。『現代ロシアの経済構造』(二 四年、慶應義塾大学出版会)においては、ロシアの経済の「現実」を詳しく分析し、スラブ研究センターのある北海道大学から学術博士号を取得した。さらに、『ロシア経済の真実』(二 五年、東洋経済新報社)では、ロシアの行政改革、企業統治、石油・ガス部門、「KGB」、軍産複合体についても紹介した。本書では、こうした一連の著作においてこれまで必ずしも十分に考察できなかったロシアの石油およびガス部門の「内部」に切り込みたい。なお、パイプラインそのものにかかわる諸問題は二 七年秋に刊行予定の拙著『パイプラインの政治経済学』(法政大学出版局)を参照していただきたい。